

# ともの家 だより

令和元年 11 月第 60 号

発行 社会福祉法人ともの家

## ＜いかに障害が重くとも尊厳ある生活を保障する＞

### ともの家創立二十周年にむけて 喜びと誇り

理事長 永和淑子

1999 年 2 月新たな福祉活動を始めようという永和良之助の呼びかけに集まった 17 名の有志。援助の必要なひとの「友」となり「ともに」歩もうという思いから団体名を「ワーカーズコレクティブとも」と決めた。ワーカーズコレクティブは参加者ひとりひとりが雇用者であり同時に労働者である対等な関係であった。拠点は岩崎町の松岡キヌさん宅をお借りして「困りごとよろず相談」。会員手作りの素敵な看板と古風な洋館風の小さな建物「岩崎ともの家」は孤独な老人や障害者の憩いの場になろうとした。配布したチラシをみての利用第 1 号は裏木戸の修理。大工仕事の得意な男性会員が出張サービスをした。電動車いすでやってきた自立生活の脳性マヒの若者は昼食をとりベッドで一眠り。病気で半身不随となり車椅子生活となった若い女性は畳の上に寝転がり手足を伸ばして「これがしたかった!」。独居の方々を対象にした食事会は、ボランティア手作りの自慢の品が食卓いっぱいになり並び話も弾んだ。近所のアパートに住む在宅酸素の肺疾患の男性には毎日お弁当を届けた。

そんな方たちを誘って、開通したしまなみ海道を馬島まで歩いた。来島大橋の上での記念写真は強い風に帽子や上着をおさえながらもみんな楽しそう。夏には長期病棟暮らしの重度心身障害児の里家になり在宅生活を味わってもらった。週に 2 回認知症の落ち着かない方の預かりやご家族の事情によるお年寄りの短期宿泊など、利用形態は様々であったが、すべてひきうけた。利用料金は低額で利用は必要なときに申し込む程度の活動収入では会員の生計を維持できなく、正業につく会員や脱会する人も出たが、会員の心はあ

たかな喜びに満たされていたように思う。利用者たちの小さな満足が私たちの仕事に誰かの役にたつ有用感とやりがいをあたえてくれた。介護保険施行前のこの1年間の「ともの家」の多様な経験はその後のともの家につながっていく。

2000年6月ともの家は溝辺町に「溝辺ともの家」を新築し、高齢者の援助は介護保険事業で障害者支援や短期宿泊はNPO事業でと2本立てで続けた。介護事業所の職員として、またワーカーズコレクティブともの会員として職員は（全員ではないが）当然この2事業にかかわった。当初の職員一人ひとりの顔を思い浮かべながら喜びや苦労をともにした日々と時間を感謝の思いで懐かしんでいる。20周年誌作成のために資料集めをしているが彼らの一人（2000年当時23歳）のこんな文章をみつけた。

「介護を生業にしていると、介護って言葉やなあつくづく感じる。心のこもった丁寧な言葉遣いをしていると心のこもった丁寧な態度になるし、逆に心のこもっていない言葉遣いをしていると心のこもっていない態度になると私は思う。お年寄りにとって介護者のとる態度や言葉は生活の質そのものであると思っている。痴呆症の苦しみや老いていく悲しみ、身近に迫る死の恐怖を理解し温かく接してくれる職員の言葉や笑顔がどんな薬よりもお年寄りを癒していると私は感じる。しかし、相手の苦しみを理解し温かい言葉をかけることなどかなり賢い人間にしかできない！と思う。それを生業にしている自分にちょっとした誇りをもっている。」

※今年度は、職員研修の一環として各事業所の困難事例を持ち寄り「事例検討会」を行うことになりました。第1回目は7月、この道の検討会が行われました。

## この道 事例検討会より

元・この道管理者 乗松 守亮

今回、この道では介護拒否や抵抗のある利用者への対応や取り組みについての事例をあげました。Mさんは介護に対して拒否や抵抗が強く、長年関わっている職員にも「叩くぞ」と手を上げ、暴言など日常茶飯事です。特に、女性や新しい職員にはきつく、とても険しい表情になることから、

職員だけでなく本人もとてもしんどい思いをしているのではないかと考えました。事例検討では、様々な意見や質問が出ました。今までに取り組んできた内容から、一步踏み込んだ内容まで色々な考えや取り組みが提案され、精神面のケアとして「本当は寂しいのではないか?」「話し相手がほしいのでは?」といったところまで深い意見もありました。今回の検討は、利用者さん一人ひとりとの関わり方を見直す良いきっかけとなりました。ともの家の運営理念を再確認し、利用者の方が笑って過ごせるようにこれからも頑張っていきたいです。

## 事例検討会の感想

小規模多機能ともの家 吉岡 貴志

私自身、この道で8ヶ月勤務していた時期に、Mさんのケアに携わっていたので当時と今のADLを尋ねる質問をしたり、具体的な介護抵抗について質問したりして現状を把握した上で、どのような対応が必要か考えた。自分ひとりでは思いつかない具体的な方法が、グループで考えることで色々出てきたのが爽快だった。中でも特に面白いと思ったのが、「Mさんは鼻歌を歌っているときに機嫌がいいので、夜間こちらから鼻歌を歌いながら話しかける」というものだ。他にも、具体的な方法をこの道の職員さんたちが実践されたのかどうか気になるころだ。後日、時間を取って効果はあったのかどうか報告が聞きたいと思った。

## 職員リレーエッセイ④

今回は、同じ時期に入社された高福さんと曾和さんをお願いしました。

ともの家この道 高福貴恵

最近初孫が生まれ私もおばあちゃんの仲間入りをしました。本人はまだ若い?つもりです(笑)  
日常ほぼ犬猫とたわむれながらK-POP、J-POP、韓流ドラマにはまり近場でコンサートなどにも友人達と行ったりと日々を楽しく過ごしています。  
休みの日には孫を連れ息子夫婦が遊びに来たり、また友人が遊びにと誘って

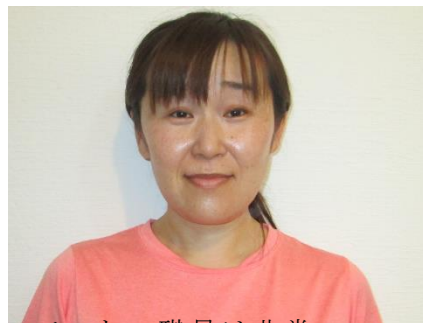


くれます。そんな中でも主人と向き合う時間を作り会話をすると「テレビが観たいから少し静かにして！」なんて言葉が返ってきたりと…でもしゃべってます（笑）一生懸命頑張って仕事や私生活を楽しく過ごせるように心がけています。

「わからないことへのまなざし」

ともの家 吾も紅 曾和あすか

認知症について話すとき、安易な言葉で触れられない戸惑いがあった。家族が認知症になり、見守ってきた中で、私の中で変わっていったのは、その人が自分の思いに真っ直ぐな主人公になっていく、そんな実感だった。



ここにも、主人公がたくさんいると感じる。

初めての夜勤。出勤すると、Kさんが行方知れずになっていた。職員は非常事態に奔走していた。みんな心配で、不安で、怖かった。Kさんの無事を祈っていた。道で倒れているKさんを見つけた方が救急車を呼んでくれたことでKさんは見つかった。

その日の夜、病院より戻り何事も無かったように夕食を召し上がる。転んだときに傷ついた唇が痛そうだった。部屋へ戻るとき、「今日は一日お疲れになりましたね」と伝え、Kさんは「いいえ、今日はとっても楽しかったです」と血まみれの口元に生き生きとした笑みを浮かべた。Kさんにとって、ヒッチハイクして見知らぬ車に乗ったことも、通りすがりに助けられたことも帰り道の冒険だった。Kさんの笑顔が忘れられない。

徘徊する人は、人生の忘れ物を取りに戻ろうとしているのだと聞いたことがある。Kさんはこのところ「帰ります」と帰り支度して外へ向かうことが多い。一緒に時計草を眺め、「お花の王様みたい」と笑い、花木を手に取り香りを楽しまれた。「喉が渴きましたね、お茶を飲みに行きませんか？」と吾も紅へ誘う。一服し一息もつかぬ間に「帰ります」と玄関を出て行く。表情が険しい。「朝も昼も夜も帰れない。堂々巡りだ。」足元ががくがくとして倒れこむ。「放っておいて、あなたは帰りなさい。構わないでいいから」凜とあろうとされ、人を頼ろうとせず、伸ばされた手を振り払い、おぼつかない足取

りで記憶の中の「家」を探す。たまらない気持ちになる。それでも Kさんは歩いて歩いて、何か大切な忘れ物を捜し続けているのか。

介護者にはわからない、その人の紡ぐ物語なので、こうなのだと決められない。添うことでおもいをなぞる。気持ちが理解できずもどかしさを感じることもある。わたしにできることは、一緒に困ることぐらいだ、と腹をくくる。そんなとき Kさんの「帰る」という圧倒的なおもいの強さにはっとさせられた。それが Kさんの持つ力なのだ。

わからないことと向き合うのが、人は苦手なのだと思う。それでもわからないことに添い、見つめたとき、ふとその人の持つ真っ直ぐなおもいの力に触れることがあるように感じる。その不思議さをわからないなりにも掬い上げていく感受性を、一歩ずつ磨いていけたらと思う。

## 職員投稿

### 「再会」

溝辺ともの家 末廣 美和

彼女が脳腫瘍で長期入院しているとの情報は 2, 3 年前。その後の情報は無く心配していた。

そして、彼女の帰省の折に、6 年ぶりに再会した。懐かしい、かつての英語キャンプ開催の地で。高校生だった私たちは、一年に一度の英語漬けのわずか数日間で多くの友人を得た。おっとりして、美人で、誰からも好かれる彼女は、多くのキャンパーの憧れの存在だった。

さて、彼女の右側には旦那様、そして左側には私が寄り添って歩く。介護の経験から通常、マーチのようにイチ、ニ、イチ、ニと傍らに付き添って歩を進めることが多い。しかし、彼女の場合は「ワルツ」だった。ゆっくりとイチニサン、イチニサン、と歩く。両足はほとんど上がらず、歩幅も小さい。おまけに駐車場からユースホステルまでは下り坂。その坂を降りると玄関までふぞろいの形をしたタイルのような石畳なのだ。ついに途中からは車椅子を使用した。が、ガタガタと進み具合は良くない。座っている本人も苦痛だったかもしれない。

退院はしたものの、日常生活は不便なことばかり、とのこと。更衣に時間

がかかり、その間に疲れてしまう。それでも彼女の瞳には「憂い」は見えなかった。笑顔がまぶしかった。

ここ数年、私の周囲ではこれまでになかったことが起きている。難病と闘う同級生、癌を克服した友人たち、幼なじみの癌死、そして彼女。彼らにエールを送る。今、健やかで、何気ない生活を送れていることに感謝。

新緑の中 再会の友と歩む 大病の後 まぶしい笑顔

介護ひまなし日記

～北欧旅行顛末記⑤～

ともの家 吾も紅 永和 里佳子

さて、北欧に到着した一同。夜が明けて食堂に集まった顔は、長旅の疲れにも負けず清々しい活気に満ち溢れている。これからが海外研修だ！今回はあらゆる意味で「節約」旅行だった。夕食は各自で取る。移動は市バスか市電。徒歩も多い。イエテボリ市民に限りなく近い暮らし感覚なのだった。

第1日目は「3つの財団」という団体の運営する高齢者住宅の見学だった。市街地にあり、大学や病院に隣接している。駅前から友子さんの誘導で市電に乗る。イエテボリは天気が変わりやすく、晴れ間が少ない。油断しているとすぐ冷たい雨が降ってくる。雨具は必須だった。飛び乗った市電で友子さんは「Suica」のようなパスをかざす。驚いたことにドアのどこからでも降りできて、誰もパスをかざしたかどうかチェックしない。友子さんに聞くと、「無賃乗車をしようと思えばできるでしょうね。」「えっ、取り締まられないのですか？」「ごくたまに、警官が乗ってきてパスを見せてくださいということはありません。その時に何倍も払うようなバカなことはしないでしょ」とのことだった。タダ乗りするようなせこい人間はこの国にはいないだろう、という性善説がまかり通る、のんびりした国なのだった。

建物を見て驚いた。まるでお城！これが高齢者施設だとは。300年ほど前に慈善家の寄付した、古い建物を使っているらしい。広いホールは教会の礼拝や、ダンスの催しに使うとのこと。アクティビティのための本格的器具がそろったジム（職員も勤務中に使える）や日光浴の部屋があったし、オランダの認知症ビレッジで購入したというゲームもあった。談話室も充実してお

り、各フロアーにお茶が飲めるキッチンダイニングがあった。(テーブルの上のその日の夕食のメニューを見ると選択制になっていた。)特に良かったのは庭だった。野菜を育てる温室があり、野鳥もやってくる。ベンチでお茶をするお年寄りの姿があり、その足元をニワトリたちが気ままに歩き回っていた。

財団では環境の全てはケアの一環として大切にしている。芝生や砂利、石畳などあえて地面に変化をつけた中庭は、足が触れたときの感覚を変え、五感を刺激する。その庭に桃やブドウなど食べられる木を植え食欲を誘う。ニワトリや金魚を飼っているのも話題づくりのため。「餌をあげましょう」と外に出ることもある。庭に出ることを生活の一部に使っている。

新しい技術は現場で作る、とも言われていた。トイレ介助に一番手がかかるなら、自分でトイレに行けたら一番良い。どんな重度な人でも立って歩くことを推進するし、座位が取れることを目指す。日本の現場では、重度な人が多いと大変だと愚痴ばかり聞こえるが、大変でない方法を工夫するのが介護であると考えている。観点が違うのだと感じた。また、食事介護ロボットも導入していた。これは、入居者から「人間から介護されるのが嫌だ」という声があったためだという。あらかじめ何をどの順番で食べたいかプログラミングしてロボットに記憶させる。リモコンを押す力は残っているのでそうやって「自分で食べている」のだという。これは、徹底した自立の概念を象徴するエピソードだと思った。日本では「介護＝三大介護（食事、排泄、入浴）」であり、それを手伝うことが介護の仕事だと思われている。しかし、当事者にとって、三大介護を受けるほど恥ずかしいことはなく、人間性を損なったと感じるかもしれない。当たり前のように「食べさせてあげている」行為を慎まなければならない。人間は、誇り高い生き物なのだ。  
(つづく)

## <本部より>

・異動のお知らせ～管理者が交代しました！(2019年7月より)

アンジュールともの家…仙波しのぶ、ともの家この道…渡邊研太郎 溝辺ともの家…乗松守亮、小規模多機能ともの家…古川晃
--

## 家族の投句

早梅の一輪  
義母を見舞ひけり

これは、吾も紅の利用者・仙波アツミさんの息子さん（仙波誠二さん）の作品です。奥さんの母である大上宏子さんが骨折した入院先で詠まれました。大上さんはその後吾も紅に戻ってきましたが、6月に脱水症状で再入院、8月にひっそりと息を引き取られました。仙波修三さんの初盆の頃でした。上品で多才、優しくユーモアのある大上さん。お茶を点ててもらう約束が実らず、寂しさが募ります。修三さんの俳句魂が息子の誠二さんに引き継がれているのでしょうか。残された者が力強く生きていくことが、亡くなられた人の弔いになるのかもしれませんが。

・2018年度、お世話になった方々～感謝！

### 【寄付】

宮内みどり、横畑幸生、大野博敏、仙波誠二、栗田芳樹、ともの家後援会  
計 1,020,000円

### 【寄贈】

千葉薫（花瓶、お菓子）、株式会社真木（タオル）、野本貞樹（野菜）、竹中千恵子（古新聞等）、濱田令子（ベッド、車椅子、歩行器）、北村陽子（布団、衣類、テーブル、たんす）、渡邊公三（野菜、果物）、中嶋一善（もち米）、吉金理（焚付）、タウンマート（果物）、ともの家この道入居者家族（資源ごみ、バザー用品、陶器、グラス、お盆等）、眞鍋てるみ（車両）、永和里佳子（車両）

【ボランティア】矢野隆三、足利篤代、宮内みどり、井谷昭、井谷かよ子、藤田由美子、阪本史子、坊城絹子、千葉昇、千葉薫、越智愛、野尻千鶴、松下章子、プルメリアフラダンス教室、越智節子

## 編集後記

今回の「ともの家だより」は、職員や家族の方からたくさんの投稿を頂き、充実した誌面になりました。今後もあらゆる方面から活発なご意見が寄せられることを期待します。“ともに”よりよい機関紙を作っていきましょう！（里）